

本レジュメの巻末には、Appendix のページを付けている。必要に応じて参照する。

## 1 12 章まえがき

ここはワケわからなかった。

## 2 主成分分析

読み合わせ。

### 2.1 分散最大化による定式化

データ点  $\mathbf{x}_n$  を  $\mathbb{R}^D \rightarrow \mathbb{R}^M$  ( $M < D$ ) として射影することを考える。簡単のため  $M = 1$  の部分空間への射影について考える。この部分空間の方向を、 $D$  次元空間の単位ベクトル  $\mathbf{u}_1$  で表す。このベクトルを用いるとデータ点  $\mathbf{x}_n$  は  $\mathbf{u}_1^T \mathbf{x}_n$  としてスカラー値に射影される。

他のデータ点についても同様の射影をおこなうことで、明らかに射影後のデータの平均値は  $\mathbf{u}_1^T \bar{\mathbf{x}}$  となる。ここで  $\bar{\mathbf{x}} = \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \mathbf{x}_n$  である。

ここで、射影されたデータの標本分散は次のようになる。

$$\begin{aligned} \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N (\mathbf{u}_1^T \mathbf{x}_n - \mathbf{u}_1^T \bar{\mathbf{x}})^2 &= \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N (\mathbf{u}_1^T \mathbf{x}_n - \mathbf{u}_1^T \bar{\mathbf{x}})(\mathbf{u}_1^T \mathbf{x}_n - \mathbf{u}_1^T \bar{\mathbf{x}})^T \\ &= \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \mathbf{u}_1^T (\mathbf{x}_n - \bar{\mathbf{x}})(\mathbf{x}_n^T \mathbf{u}_1 - \bar{\mathbf{x}}^T \mathbf{u}_1) \\ &= \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \mathbf{u}_1^T (\mathbf{x}_n - \bar{\mathbf{x}})(\mathbf{x}_n - \bar{\mathbf{x}})^T \mathbf{u}_1 \\ &= \mathbf{u}_1^T \mathbf{S} \mathbf{u}_1 \end{aligned} \quad (1)$$

ただし  $\mathbf{S} = \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N (\mathbf{x}_n - \bar{\mathbf{x}})(\mathbf{x}_n - \bar{\mathbf{x}})^T$  として共分散行列を定義している。

この射影された分散を最大化することを考えよう。これはベクトル  $\mathbf{u}_1$  が単位ベクトルであるという制約条件  $\mathbf{u}_1^T \mathbf{u}_1 = 1$  における停留値問題であるから、ラグランジュ未定乗数法を用いれば良い。いまは  $\lambda_1$  をラグランジュ未定乗数として

$$L = \mathbf{u}_1^T \mathbf{S} \mathbf{u}_1 + \lambda_1 (1 - \mathbf{u}_1^T \mathbf{u}_1) \quad (2)$$

の最大化を実行すればいい。 $L$  を  $\mathbf{u}_1$  で偏微分すると

$$\frac{\partial L}{\partial \mathbf{u}_1} = \mathbf{S} \mathbf{u}_1 + \lambda_1 (-\mathbf{u}_1) \quad (3)$$

ここで  $\frac{\partial L}{\partial \mathbf{u}_1} = 0$  とすれば次の方程式が導かれる。

$$\mathbf{S} \mathbf{u}_1 = \lambda_1 \mathbf{u}_1 \quad (4)$$

これが  $L$  についての停留条件であり、 $\mathbf{S}$  についての固有方程式である。なお、 $\mathbf{u}_1$  は  $\mathbf{S}$  の固有ベクトル、 $\lambda_1$  はそのベクトルに対応する固有値である。

式 4 の両辺に左から  $\mathbf{u}_1^T$  をかけると

$$\mathbf{u}_1^T \mathbf{S} \mathbf{u}_1 = \lambda_1 \quad (5)$$

となり、射影後の分散は  $\mathbf{u}_1$  を最大固有値  $\lambda_1$  に属する固有ベクトルを選んだときに最大になることがわかる。この固有ベクトルは第一主成分と呼ばれる。

なお、その他の主成分を得るためには

- ・求めるベクトルに対して、既に得られている主成分（ベクトル）と直交するという条件を課す
- ・上記の直交条件のもとで、射影分散を最大化する

という手続きを踏めばいい。

一般の  $M$  次元への射影についても次の事実を確認したい：射影されたデータの分散を最大化するような  $M$  次元部分空間の上への線形写像が、データ共分散行列  $\mathbf{S}$  の上位  $M$  個の固有値に属する  $M$  本の固有ベクトルにより定義される（空間が張られる）。の議論および結果については読み合わせとする<sup>\*1</sup>。

以上をまとめると、主成分分析ではデータ集合の平均  $\bar{\mathbf{x}}$  と共分散行列  $\mathbf{S}$  が必要であり、さらに  $\mathbf{S}$  の上位  $M$  個の固有値に対応する  $M$  個の固有ベクトルを求める必要がある。

計算負荷のところはよくわからんので読み合わせ。

## 2.2 誤差最小化による定式化

ここでは先ほどの分散最大化とは異なるアプローチで定式化をおこなう。まず定式化のための準備として必要な量を定義し、問題の設定をおこなう。

いまデータ点  $\mathbf{x}_n$  を正規直交基底  $\mathbf{u}_i$  により

$$\mathbf{x}_n = \sum_{i=1}^D \alpha_{ni} \mathbf{u}_i \quad (6)$$

と書くことにする。なお  $\{\mathbf{u}_i\}$  は  $D$  次元のベクトルである。いま低次元の部分空間（次元数は  $M$  とする）に限られた数の  $\mathbf{u}_i$  を用いてデータ点  $\mathbf{x}_n$  を近似し、射影をおこないたい。近似の際に、 $M$  次元の線形部分空間は（元の空間の初めの） $M$  個の基底ベクトルを用いてやれば良い。各データ点  $\mathbf{x}_n$  は次のように近似することができる。

$$\tilde{\mathbf{x}}_n = \sum_{i=1}^M z_{ni} \mathbf{u}_i + \sum_{i=M+1}^D b_i \mathbf{u}_i \quad (7)$$

以下において我々が解きたい問題は、この近似された  $\tilde{\mathbf{x}}_n$  と元のデータ点  $\mathbf{x}_n$  との距離について、全データで平均を取った量を最小化するというものになる。その量は次の式で表される。

$$J = \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \|\mathbf{x}_n - \tilde{\mathbf{x}}_n\|^2 \quad (8)$$

これは  $\mathbf{x}_n$  と  $\tilde{\mathbf{x}}_n$  との誤差と考えられ、この  $J$  を最小化することで  $\{z_{ni}\}, \{b_i\}, \{\mathbf{u}_i\}$  を決定するというのが、誤差最小化による定式化である。最小化の手続きはシンプルであり、 $J$  を  $\{z_{ni}\}, \{b_i\}, \{\mathbf{u}_i\}$  について微分し停留条件を考えるだけである。詳細な計算過程については App を参照してほしい。

<sup>\*1</sup> 演習問題解答.pdf p.85-86 参照。数学的帰納法を用いて証明をおこなう。

$J$  をあとで計算しやすくするために少々展開を施しておく。まずは (12.10) を (12.11) に代入してやる。

$$J = \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \left\| \mathbf{x}_n - \left( \sum_{i=1}^M z_{ni} \mathbf{u}_i + \sum_{i=M+1}^D b_i \mathbf{u}_i \right) \right\|^2 \quad (9)$$

次に式 9 を展開し、転置の記号を括弧内に入れ込む。

$$\begin{aligned} J &= \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \left( \mathbf{x}_n - \sum_{i=1}^M z_{ni} \mathbf{u}_i - \sum_{i=M+1}^D b_i \mathbf{u}_i \right)^T \left( \mathbf{x}_n - \sum_{j=1}^M z_{nj} \mathbf{u}_j - \sum_{j=M+1}^D b_j \mathbf{u}_j \right) \\ &= \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \left( \mathbf{x}_n^T - \sum_{i=1}^M z_{ni} \mathbf{u}_i^T - \sum_{i=M+1}^D b_i \mathbf{u}_i^T \right) \left( \mathbf{x}_n - \sum_{j=1}^M z_{nj} \mathbf{u}_j - \sum_{j=M+1}^D b_j \mathbf{u}_j \right) \end{aligned} \quad (10)$$

ここからは  $\{z_{ni}\}, \{b_i\}$  による微分計算となる。App を参照してほしい (Go to App)。

最後に  $\{\mathbf{u}_i\}$  で  $J$  を微分したいが、その前に  $J$  を  $\{\mathbf{u}_i\}$  で表しておく必要がある。そのために式 (12.12-13) を式 (12.10) に代入し  $\mathbf{x}_n - \tilde{\mathbf{x}}_n$  を変形したい。

$$\begin{aligned} \mathbf{x}_n - \tilde{\mathbf{x}}_n &= \mathbf{x}_n - \left( \sum_{i=1}^M \mathbf{x}_n^T \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i + \sum_{i=M+1}^D \tilde{\mathbf{x}}^T \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i \right) \\ &= \mathbf{x}_n - \left( \sum_{i=1}^D \mathbf{x}_n^T \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i - \sum_{i=M+1}^D \mathbf{x}_n^T \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i + \sum_{i=M+1}^D \tilde{\mathbf{x}}^T \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i \right) \\ &= \mathbf{x}_n - \mathbf{x}_n + \sum_{i=M+1}^D \mathbf{x}_n^T \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i - \sum_{i=M+1}^D \tilde{\mathbf{x}}^T \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i \quad (\because \text{式 12.9}) \\ &= \sum_{i=M+1}^D \mathbf{x}_n^T \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i - \sum_{i=M+1}^D \tilde{\mathbf{x}}^T \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i \\ &= \sum_{i=M+1}^D \{(\mathbf{x}_n - \tilde{\mathbf{x}})^T \mathbf{u}_i\} \mathbf{u}_i \end{aligned} \quad (11)$$

大変申し訳ないが、ここから最後まで読み合わせ。



# App 誤差 J の微分計算

(12.11) で与えられる J について  $\{Z_{ni}\}$  と  $\{b_j\}$  による微分を求め

(12.12-13) を導きたい。

$\{Z_{ni}\}$  による微分

式(10)を展開し Z に依らない項を棄てていく。

$$J \sim \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \left( - \sum_{i=1}^M Z_{ni} U_i^T x_n - x_n^T \sum_{j=1}^M Z_{nj} U_j + \sum_{i=1}^M Z_{ni} U_i^T \sum_{j=1}^M Z_{nj} U_j \right. \\ \left. + \sum_{i=M+1}^D b_i U_i^T \sum_{j=1}^M Z_{nj} U_j + \sum_{i=1}^M Z_{ni} U_i^T \sum_{j=M+1}^D b_j U_j \right) \\ = \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \left( \boxed{\dots} + \sum_{i=M+1}^D \sum_{j=1}^M b_i Z_{nj} \delta_{ij} + \sum_{i=1}^M \sum_{j=M+1}^D Z_{ni} b_j \delta_{ij} \right) \quad (\because (12.7))$$

常に  $i \neq j$  故に  $\delta_{ij} = 0$

$$= \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \left( - \sum_{i=1}^M Z_{ni} U_i^T x_n - x_n^T \sum_{j=1}^M Z_{nj} U_j + \sum_{i=1}^M \sum_{j=1}^M Z_{ni} Z_{nj} \delta_{ij} \right)$$

$\sum_{j=1}^M Z_{nj}^2$

この J を  $Z_{nj}$  で偏微分すると

$$\frac{\partial J}{\partial Z_{nj}} \sim \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \left( - \sum_{i=1}^M \delta_{ij} U_i^T x_n - x_n^T U_j + 2 Z_{nj} \right)$$

$$\sim U_j^T x_n - x_n^T U_j + 2 Z_{nj}$$

$$= - 2 x_n^T U_j + 2 Z_{nj}$$

$$\frac{\partial J}{\partial Z_{nj}} = 0 \quad \text{とすると} \quad Z_{nj} = x_n^T U_j \quad \text{式(12.12)が導かれる。}$$



$\{b_i\}$  による微分

式(10)を展開し  $b$  に依らない項を落としていく.

$$J \sim \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \left( -x_n^T \sum_{j=M+1}^D b_j u_{nj} + \sum_{i=1}^M z_{ni} u_i^T \sum_{j=M+1}^D b_j u_{nj} - \sum_{i=M+1}^D b_i u_i^T x_n + \sum_{i=M+1}^D b_i u_i^T \sum_{j=1}^M z_{nj} u_{ij} + \sum_{i=M+1}^D b_i u_i^T \sum_{j=M+1}^D b_j u_{ij} \right)$$

$$= \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \left( \boxed{\dots} + \sum_{i=1}^M \sum_{j=M+1}^D z_{ni} b_j \delta_{ij} + \sum_{i=M+1}^D \sum_{j=1}^M b_i z_{nj} \delta_{ij} \right)$$

※  $i \neq j$  なの  $\delta_{ij} = 0$

$$= \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \left( -x_n^T \sum_{j=M+1}^D b_j u_{nj} - \sum_{i=M+1}^D b_i u_i^T x_n + \sum_{i=M+1}^D \sum_{j=M+1}^D b_i b_j \delta_{ij} \right)$$

$+ \sum_{j=M+1}^D b_j^2$

この  $J$  を  $b_j$  で偏微分すると

$$\frac{\partial J}{\partial b_j} \sim \frac{1}{N} \left( -x_n^T u_{nj} - \sum_{i=M+1}^D \delta_{ij} u_i^T x_n + 2b_j \right)$$

$$= \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \left( -x_n^T u_{nj} - u_{nj}^T x_n + 2b_j \right)$$

$$= -2 \bar{x}^T u_j + 2b_j$$

$$\frac{\partial J}{\partial b_j} = 0 \text{ とすると } b_j = \bar{x}^T u_j, \text{ 式(12-13) が導かれる.}$$



# App 誤差 J の微分計算

(12.11) で与えられる J について  $\{Z_{ni}\}$  と  $\{b_j\}$  による微分を求め

(12.12-13) を導きたい。

$\{Z_{ni}\}$  による微分

式(10)を展開し Z に依らない項を棄てていく。

$$J \sim \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \left( - \sum_{i=1}^M Z_{ni} U_i^T x_n - x_n^T \sum_{j=1}^M Z_{nj} U_j + \sum_{i=1}^M Z_{ni} U_i^T \sum_{j=1}^M Z_{nj} U_j \right. \\ \left. + \sum_{i=M+1}^D b_i U_i^T \sum_{j=1}^M Z_{nj} U_j + \sum_{i=1}^M Z_{ni} U_i^T \sum_{j=M+1}^D b_j U_j \right) \\ = \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \left( \boxed{\dots} + \sum_{i=M+1}^D \sum_{j=1}^M b_i Z_{nj} \delta_{ij} + \sum_{i=1}^M \sum_{j=M+1}^D Z_{ni} b_j \delta_{ij} \right) \quad (\because (12.7))$$

常に  $i \neq j$  故に  $\delta_{ij} = 0$

$$= \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \left( - \sum_{i=1}^M Z_{ni} U_i^T x_n - x_n^T \sum_{j=1}^M Z_{nj} U_j + \sum_{i=1}^M \sum_{j=1}^M Z_{ni} Z_{nj} \delta_{ij} \right)$$

$\sum_{j=1}^M Z_{nj}^2$

この J を  $Z_{nj}$  で偏微分すると

$$\frac{\partial J}{\partial Z_{nj}} \sim \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \left( - \sum_{i=1}^M \delta_{ij} U_i^T x_n - x_n^T U_j + 2 Z_{nj} \right)$$

$$\sim U_j^T x_n - x_n^T U_j + 2 Z_{nj}$$

$$= - 2 x_n^T U_j + 2 Z_{nj}$$

$$\frac{\partial J}{\partial Z_{nj}} = 0 \quad \text{とすると} \quad Z_{nj} = x_n^T U_j \quad \text{式(12.12)が導かれる。}$$